

観光研究から移動学へ

From tourism studies to migration studies

今 防 人

英語コミュニケーション学科非常勤講師

キーワード：観光、移動、移住

<はじめに>

観光が旅行を主たる要素とすることには異論がないだろう。もちろん現代の観光が様々な関連分野を有していることは周知の通りである。移動手段、宿泊、飲食、お土産あるいはガイドなど数多く挙げられよう。クック商会の禁酒同盟を顧客とする鉄道による団体旅行は観光代理業の嚆矢とされる。そうだとすれば観光業は19世紀の産物である。観光研究が一つの学問として例えば観光学として成立するためには普遍的研究対象を有しなければならない。19世紀に登場した風景や景観を見物する観光は普遍的対象とは言い難い。もちろんこれまでの多くの観光研究が示すように古代・中世ヨーロッパの巡礼にも観光的な要素が含まれていたことは否定できない。例えば、古代ギリシアの歴史家ヘロドトスによるエジプト旅行は現代の異文化視察旅行に類似しているかもしれない。また江戸時代のお伊勢参りが現代の旅行に相通じる要素を帯びていたと多くの研究者が指摘している。しかしながら、これらの旅が習俗的であっても宗教的行為であったのは間違いない。習俗化した宗教的行為である。

将来、観光研究は人類の普遍的行為である移動を対象とする移動学（仮称）の中に包摂されることになるだろう。本稿では移動を主要な研究対象とする既存の業績を取り上げることで移動学構築の準備としたい。

* 「移動」という極めて大きなテーマは大変魅力ある内容を有している。動物学、生理学などの分野からも移動に関するアプローチは可能であるしまた、必要である。這う、歩く、走る、跳ぶなどの基本的な移動の形態は横になる、眠るなどの静止の形態と立つ、座るなどの中間的な形態の三種の有り様の相互関係は興味深い。人間の生、成る、老いる、死という三つの位相とも密接な関係を有している。『オイデプス王』の謎ときである。生理学的にも運動論的にもあるいは武

術の面からもこの三種の有り様は大変興味ある相互関係を示す。例えば、現在では健康面から注目されている気功の練習方法は「動功」と「静功」に大別される。前者は身体の動きを伴う。しかも意識の有り様も伴う。後者はいわゆる瞑想であるが上記の中間形態でもある。調身、調心、調息を強調する座禅にも似て静功は極めて意識的な身体の操作を伴う。禅宗とりわけ臨済禅では厳格な身体の操作、ある姿勢を維持する。しかもそれは放松（リラククス）を伴っている。姿勢の維持と放松の両者は極めて微妙なバランスをとる。姿勢という緊張の中の放松なのである。

こうしたテーマは大いに興味をそそるが別の機会に取り上げる禁欲を課さねばなるまい。本稿では初歩的な人類史の常識から出発する。

＜人類の移動＞¹

ラッセル・キング編の『図説 人類の起源と移住の歴史—旧石器時代から現代まで』の前提は「人類史の流れの中で絶えず繰り返されてきた、移動や移住」というものである。この意味は「移住が世界の歴史そのものであり……人間は移住者として生まれており、ある住居から別の住居へと移動し、そこで新しい環境に適応するという行為によって進歩してきた」ということになる。

ここでは極めて重要な歴史観が提示されている。すなわち人間は定住よりも移動・移住を行う存在なのである。我々日本人にはこのことは理解しにくいかもしれない。少なくとも江戸時代には法的にも移動は許可制であり国民の大多数の移住は禁止されていたというのが定説である。しかしながら、近年の研究は農民の領外移住禁止が厳格に遵守されていたことに疑問を投げかける研究がある。例えば、越後の百姓が蝦夷地に渡り鯨漁に携わり故郷には帰らない。あまつさえその地で嫁をとり世帯を構え、故郷の人はそれを知っていたが村役人は素知らぬ顔だったという。身分制も株を買えば商人も武士になれるというように制度の柔軟な運用があったのだろう。

さらに歴史学界では「鎖国」観念に疑問が提示されている。鎖国とは厳密には日本人の海外渡航禁止であり、オランダ、朝鮮以外の外国人の日本への渡航を禁止することである。もちろん鎖国とは言えオランダ、朝鮮とは正式の国交を結んでいたし釜山には倭館という日本人町が幕末まで存在し1,000人近い日本人が暮っていた。これは対馬藩の支配下にあった。もちろん幕府は知っていた。対馬藩は朝鮮との外交の窓口だった。

日本人の海外渡航禁止もかなり怪しいのではなかろうか？ その良い例が北前船である。蝦夷を出た船は日本海を通り富山、金沢等に寄港し鹿児島に着き、さらに琉球に行く。琉球から先へ行ったかどうかの記録はない。この北前船には配置薬の富山の行商人が乗っている。藩外者の入国を極めて厳重に取り締まっていた薩摩へこれらの行商人はフリーパスだった。

豪州まで行ったという銭屋五兵衛の伝説が正しいならば、琉球から先にまで渡航していたと見られる。銭屋の墓はオーストラリアにあるという説もある。当時やはり海外への渡航は禁止されていたから、たとえ渡航したにしても記録を残す人はあり得ない。しかし、余りにも記録がなさすぎるともいえそうだ。

¹ ラッセル・キング編 蔵持不三也監訳、リリー・セルデン訳、2008年、『図説 人類の起源と移住の歴史—旧石器時代から現代まで—』終風舎。

我々は定住史観ではなく移住史観あるいは、定住民ではなく遊牧民の生活スタイルから人類史を考察する必要がある。歴史学の分野では例えば、このことは近年のモンゴル研究で従来の研究が中国から見た視点に偏っているのではないかという批判が出てきている。例えば、匈奴から見た東アジアは異なった様相を呈するというのである。匈奴は朝鮮半島にまで進出しているとも言われる。

我々は長く続いた江戸時代というスクリーンを通して歴史を見がちである。無意識のうちに定住こそ人間の本来の生活様式だと信じているのである。しかし、個々の家や地域あるいは個人の移住を集積していけば歴史的な動態が明確になるだろう。

I 人類初期の移動—ホモ・エレクトスとホモ・サピエンス²

1. ホモ・エレクトスの移動

人類の最古の祖先は 400 万年以上前にアフリカに出現したと言われている。しかし、人類が移住を開始するようになったのは紀元前 200 万年頃とされる。新たな人、ホモ・エレクトスが進化を始めると人類は初めて移住を開始する。この時期は気候の好ましい変動によりアフリカは砂漠に樹木が生まれ、サハラ砂漠は草食動物とそれを食料とする肉食動物が生息するようになった。ホモ・エレクトスは地元以外にも食料があることを知り、それらを求め自由に個人単位あるいは集団で移住した。

ホモ・エレクトスは大移動を開始する。南部へ移動したグループは数世代で南端まで達した。一方、他の集団はアフリカ北東部の「アフリカの角」に到達しシナイ半島を越えた。さらに東に向かった集団はヨーロッパ南部に向かった。その後は拡散しながらロシアのステップ地帯を越えて一部はアジアにまで到達した。こうしてジャワ原人や北京原人が生まれることになる。

ホモ・エレクトスと現代人の関係については、彼らが長い時間をかけて周囲の環境におだやかに適応し、ついに現代人へと進化した、と信じられてきた。しかし、これに対抗する理論も出てきた。それは「出アフリカ理論」と呼ばれるものである。この理論によると人類はある一箇所から進化し、それから世界中に広まっていった。この理論により現代人がなぜ一様であるかということについての唯一の説明となるとしている。つまり、進化に様々な影響を与えたと思われる多様な環境で生きていた様々な人々が、別々の道をたどって同一の種へと進化していったのはダーウィンの信じていたい、というのである。19 世紀には人類の同時発生説が唱えられた。例えば南米では各国が独立し植民母国との絆を切り離すにつれて聖書の人類発生説を批判する意味でも同時発生説が登場している。

2. ホモ・サピエンスの移動

さらに DNA 鑑定を使用した遺伝学的調査によるとあらゆる現代人の母が、わずか 20 万年前に登場したという。ホモ・サピエンスの登場である。ホモ・エレクトスとホモ・サピエンスのリン

² ラッセル・キング編著 同上。

クは謎のままである。しかし、ホモ・サピエンスが前者と同様にアフリカを故地としていた。現代の人間の直接の祖先であるホモ・サピエンスは40万年前から13万年前にかけてのある時期に進化し始める。しかし、ホモ・サピエンスは長い間アフリカの南半分に閉じ込められていた。それというのもサハラが砂漠化したからである。しかしながらやがて12万年前にサハラは再び緑化し、数千年間、その状態を保った。ホモ・サピエンスは北上を開始しエジプトの地中海沿岸に達し、そこから東に向かい現在のイスラエルやレバノンに入った。しかしながらサハラは再度砂漠化し地中海沿岸も乾燥し始めた。こうしてホモ・サピエンスの移住第一波は死に絶えたと思われる。

<現生人類の移動>

それから3万年ないし4万年が過ぎる9万年前から8万5000年前にホモ・サピエンスの新しい移住集団がアフリカを後にする。専門家たちは現代人のDNAがこの集団にまで遡れることを明らかにした。このホモ・サピエンス集団から全人類が派生したのである。8万5000年前にアフリカを出たホモ・サピエンスは1万年以内にジャワ島まで到達した。しかし、ホモ・サピエンスは前7万5000年頃、巨大な自然災害に遭遇し絶滅しかかった。スマトラ島のトバ火山が爆発し噴火は2週間続き3,000 km³もの火山灰と火山岩が放出された。この噴火により地球は以降6年間冬に逼塞しそれから1000年間過酷な寒冷期が続いた。

この破局的な大災害によりホモ・サピエンス人口は1万人以下に減ったと言われている。しかし、トバ火山の噴火後数千年間に新たな移住を開始する。当時、スマトラ、ジャワ、ボルネオからなる東アジアの島嶼部はアジア大陸の一部でありホモ・サピエンスは朝鮮半島からジャワ島まで地続きに歩いて行けたのである。さらにニューギニアとタスマニアとも結びついていた現在よりもはるか広大なオーストラリア大陸（サフル大陸）にも向かった。オーストラリアの先住民は4万年前からサフルに住み着いている考古学的証拠が見つかっている。

ホモ・サピエンスがサフルに到達するより前の4万8000年頃、別のホモ・サピエンスの一群がアジア中南部からボスポラス海峡をわたりヨーロッパに広がり始める。現生人類はユーラシア大陸全域に広がりベーリング海峡の陸橋を渡りアメリカ大陸にまで到達した。しかも移住したのは人間に限らなかった動物そして人間や動物と共に植物も移動したのである。例えば馬は原産地が北米でありこの陸橋を渡り新世界から旧世界に渡った。やがて新世界の馬は絶滅し15、16世紀になりスペイン人、ポルトガル人が連れてきた馬が新世界に広がるのである。陸橋を渡り旧世界へ移動した動物はこの他にもラクダが挙げられる。ラクダの先祖は現在でもアンデスに住むアルパカ、リヤマ、ビクーニャである。旧世界に入り長い年月をかけて現在のような双こぶらくだ、一こぶラクダに進化したのである。1492年にコロンブスが新世界に到着してからは両世界の交流はいつそう大きなものになる。旧世界からの移動は人間である。しかも、人間と共に移動してきた動物のうち病原となる細菌、ウイルスが免疫のない新世界の人々を大量に殺戮した。アステカ帝国を滅ぼした真の勝者はコルテス指揮下のスペイン軍というよりは、はしか、しょうこう熱やマラリア、様々な感染症を引き起こす細菌、ウイルスだった。

いわゆる新世界に旧世界からの人々が到着したのはヴァイキングが最初であったが持続的移住にはならず本格的な移住が開始されるのはコロンブス以降である。1492年という年が先住民にとり悪夢のような歴史が開始される年であるが旧世界の白人を中心とする人々にとっては近代世界システム構築のスタートである。グローバルな支配体制とその覇権をめぐる抗争の開始でもある。

II 歴史時代の移動 —

1. 騎馬遊牧民の出現

スキタイ文化。移動の手段を考えると人類による動物の家畜化が重要となる。まず最初に前7600年頃肥沃な三日月地帯とその周辺でヤギと羊の家畜化が始まった。³ それに少し遅れて前7000年頃にはやはり肥沃な三日月地帯の西北部で牛と豚の家畜化が進行していたとされる。移動を考えると馬が一番重要となる。但し、騎乗が可能となつてからのことである。騎乗は運輸交通手段をもたらすと同時に軍事・戦闘では比類ない機動性を発揮した。しかしながら騎乗を可能とする条件が必要である。銜と銜留め金は草原地帯で発明された。銜を使った騎乗は西アジア、地中海世界でまず出現する。前14世紀～前12世紀のことである。草原では前9～8世紀になると騎馬関係の証拠が増え始めるという。スキタイ系文化の始まりである。

2. 漢を圧倒した匈奴⁴

進んだ産業を有する中国は常に周囲の異民族とりわけ騎馬軍を有する異民族の好餌となつてきた。恐らく元のフビライの治世の後半まで中国本土は略奪の対象だったろう。しかし、略奪の対象物に注意しなければならない。人的資源が入っていることである。例えば、匈奴が漢の領土を侵掠する際の狙いは家畜と人間である。家畜、とりわけ馬は略奪の対象とするのは理解しやすいが人間は何に使用したのか？ 遊牧民である匈奴は農耕民を必要としていたのである。遊牧民が穀物を全く生産しなかったのではない。自分たちでは生産しなかったのであろう。そのため大量の人間を拉致したのである。後代に元が日本侵攻を企てた第二回の遠征の弘安の役で10万人近い江南軍を擁していたがこの軍は武器の代わりに農耕具を持っていたことが想起される。遊牧民とはいえ農耕を全く行わなかったわけではない。

また匈奴と漢の間の人間の交流はこれに止まるだけではない。双方の名立たる極めて有能な軍人や官僚が捕虜となつた際に相手に請われたりあるいは皇帝や単于から不信を買いそうになると自ら投降するなどして人的交流に貢献していることである。しかも二転三転しているケースもある。⁵

もちろん当時の漢や匈奴が近代国家と異なるのは当然であるがこうした人的交流は極めて注

³ 林俊雄、2007年、『スキタイと匈奴 遊牧の文明』講談社。

⁴ 林俊雄、同上。

⁵ 日本人の海外遠征でも人的資源の略奪は行われる。秀吉による朝鮮侵略では数万人とも言われる拉致被害者は陶工だけではない。家康による日朝関係の修復交渉で朝鮮側が拉致被害者の帰国を強く要求した。家康は諸侯に返すように要求したが「既に将兵として編入しているから無理」との回答がしばしば寄せられた。捕虜を自軍に編入することは特に異常ではなかった。

目に値する。根底には皇帝の臣下に対する不信感があろう。いちばん極端な例が明の太祖朱元璋である。太祖は幾つかの家系を数万人根絶やしにしている。皇帝は自分に対抗する可能性のある臣下を誅するし臣下もその危険を常に察知しなければならない。

漢と匈奴の時代には察知した際の逃亡先は匈奴となる。いずれにせよ双方の人的資源が相手方に渡る可能性が想像以上に大きかったのである。つまり近代におけるように双方の敷居は高くなかったのであろう。⁶

これを徹底して実施したのがモンゴルである。チンギス・ハーンは降伏した敵方の人的資源をフルに活用した。一つにはモンゴルの人口が少なかったことによる。常に戦争に明け暮れたチンギス・ハーンにとり、まさしく「雪だるま式に」人口を増やすことが必須の条件だった。モンゴルの支配地域での人種混淆は日本人の想像を絶することがある。

戦争は人間の移動を伴う。そして近代以前の捕虜は戦利品の一部であった。労働力でもあったし稀にはアステカのように身体調達が戦争の目的となる場合もあった。戦争は近代以前と以降ではかなり異なる。近代では国際法の発達もありルールが次第に決められるようになる。勝者が敗者に生殺与奪の権を持つことは次第に少なくなる。しかし、戦争とりわけ外征が移動のチャンスであることは疑いえない。近代日本においても海外旅行は多くの庶民にとり夢でしかなかった。外国旅行ではない外遊はまさしくエリート層に限られていた。庶民にとり戦争は異国に触れる最大の機会だった。戦争と移動・移住については稿を改めて論ずる必要がある。

なお元はフビライの時代の後半になると征服ではなく交易を中心とするようになる。一つには征服の対象国が少なくなったのと戦争よりも交易の方が実利があると悟ったからでもある。ハーンの正統な継承者ではなかったフビライはクリルタイというハーン選出機関での多数派工作をする必要があった。贈賄である。

近代以前の世界で戦争以外にも移動のチャンスはあった。交易、貿易である。古代ギリシア、ペルシャ帝国、エジプト、ローマ帝国、中世地中海世界など西欧を中心とする交易路のほかには中国を中心とする世界、イスラームを中心とする世界における交易、さらにこれらの世界間の交易・交流は近代以前における移動・移住の環境と実態を知る上で極めて重要である。

ここでは日本ではあまり知られていないイスラーム世界と中国の交易・交流の重要性について一言触れておこう。近年の朱子学に対するイスラームの教えの影響についての研究が盛んになっている。⁷ 朱子学はイスラームの影響を多大に受けているとの主張が次第に認められてきている。ムハマッド生存の時代に中国に使者が送られたとの半ば伝説めいた話が伝わっている。

また7世紀の唐の時代に伝わったのは明白である。北京にある牛街には最も古いモスクが現

⁶ この点はまだまだ考察の余地がある。中国社会は基本的な点で日本社会とは異なるようである。中国ムスリムの研究家長谷部氏によると山東省のモスクのアホンは中国の回儒とは一切関係がない「我々は1000年以上も無縁だった」と語ったという。中国人にとり他者はまず警戒の対象であるのかもしれない。日本人の場合は信頼がまず先にある。正確に言うと狭い農耕社会とりわけ水利権を分かち合わなければ生きていけない場合少なくとも「信頼している風を装わなければなるまい」。〈隣の不幸はカモの味〉かもしれない。

⁷ 田中逸平研究会編、平成20年、『ユーラシア東西文明に影響したイスラーム』自由社・同研究会編、平成21年、『近代日本のイスラーム認識』自由社。

存する。またコーランが最初に中国語に翻訳されたのはペルシャ語からである。イスラームにあっては哲学よりは法シャリーアの方が重視される。つまり全ての行為、判断をクルアーン（コーラン）に照らして是非を判断するのが法学者である。哲学はネオプラトニズムが裏付けに使われる。

中国に対するイスラームの思想的人的影響の研究は、今後とも極めて重要となる領域である。とりわけイスラームの神秘的なセクトであるスーフィズムは、インドのイスラームによる伝播が大きいという。イスラーム世界、インド世界そして中国世界の三者の関係も重要な領域となる。

3. 黒人奴隷貿易

近代に入り征服戦争に代わり人的資源の獲得に貢献したのが奴隷貿易である。人間が他の人間の自由を奪い自己の利益のために使役する奴隷制度は太古から存在した。戦争や刑罰あるいは借金返済不能の代償など実に様々な理由から奴隷の身分に落とされた。ヨーロッパ古典古代の文明も奴隷制度抜きにはあり得なかった。

＜新世界＞の発見者コロンブスがポルトガルの奴隷船の船長だったことはよく知られている。15世紀以降ポルトガルは奴隷貿易のチャンピオンだったが先達はイスラーム世界だった。『アラビアンナイト』を引くまでもなくイスラーム世界は奴隷制度を備えた世界だった。⁸ 長らくイスラーム勢力下にあったポルトガルが奴隷貿易を熱心に行ったことに不思議はない。

ラッセル・キングの上掲書によると⁹ ポルトガル、スペイン、オランダ、フランス、イギリスなどヨーロッパの主な貿易国が16世紀から19世紀末までの400年間にアフリカから南北アメリカやカリブ海に強制的に送り込んだアフリカ人は1,000万人を超えた。大西洋の奴隷貿易として知られるこの人間の移送は歴史上最大の強制移送に他ならない。

アフリカからアメリカ大陸までの「中間航路」の旅は悲惨なものであり平均して15%が途中で病や虐待により死亡している。さらにアメリカ大陸に送り込まれた彼らの3分の1が到着3ないし4年以内に死亡している。この死亡者数にはアフリカの内陸部から海岸部までの旅路で死亡した者の数は含まれていない。その数は何百万人に上るとされている。

人類史上、強制による移動の主たる例はこの黒人奴隷の移送である。この移送は後の歴史に様々な影響をもたらした。

4. 南北アメリカの移民社会の形成

日本語や英語では南北アメリカ (North and South Americas) や両アメリカ大陸 (two American Continents) という表現が見られるがラテンアメリカのスペイン語では el continente americano と単一の大陸アメリカと表現する。恐らく北アメリカの人々には中南米と一緒にされては迷惑と

⁸ しかし、『アラビアンナイト』に出てくる登場人物はほとんどがペルシャ系だという。アラビア人は航海は得意ではなかったようである。古代ギリシアの様々な学術、航海術も含まれる技術を伝承したのはアッバース王朝などであることは知られている。実際の航海術はペルシャ人が担当していたことになる。詳しい研究を参照する必要がある。

⁹ ラッセル・キング編 蔵持不三也監訳、リリー・セルデン訳 前掲書

の意識もあるのかもしれない。

それでも北と南ではヨーロッパ人の移民の仕方が異なるのも事実である。同じ点は先住民を虐殺したり感染症を持ちこんで免疫力のない彼らを事実上殺戮した点である。上記のように数万年前にベーリング海峡の陸橋を渡りアメリカ大陸に入った現生人類は極少数でありこれらが長い時間をかけてアメリカ大陸に広がった。これらの人々は旧世界の人々のような免疫力を備えていなかった。従って、旧世界の人々ならば死ぬことはなかった麻疹（はしか）でも感染するとバタバタと死んでいった。スペイン人によるアステカやインカの征服も本当の主役は上述のように彼らが持ち込んだ感染症と言えるだろう。

エスパニョーラ島（ハイチ島）はコロンブスが到着した頃は千数百万人の先住民が居住していたとされたが、十数年後には数十万人に激減したとされる。オランダやイギリスなどのプロテスタント国は旧教国のスペインやポルトガルを非難して酷使や虐殺のためだとしたが（*lejendario negro*（黒い伝説））主因は感染症だった。

移民の単位が南北では異なるようだ。北米では基本的に英国系では教区（*parish*）、家族が単位である。中南米のスペイン系では単身とりわけ二三流貴族の次三男が多かったようである。この相違は混血児の処遇に現れている。北では一滴でも黒人の血が入っていると黒人である。父親が白人でも母親が黒人やインディアンであれば子供は母親の民族に所属することになる。南では異なる。混血児はむしろ白人の側に属すると考えられる。従って、白人—混血児（*mestizo*（両親は白人とインディオ）、*murato*（両親は白人と黒人）—黒人、インディオ、サンボ（両親はインディオと黒人）の順となるだろう。

5. 移民、出稼ぎ、旅行者

通常、移民と言うと行ったきりと考えられることが多いが母国に帰ることも少なくない。人口が減少するくらい大量の移民を中南米に送り出したスペインにしても帰国して母国に大きな影響を与えた移民も少なくない。また移民というよりは出稼ぎ、〈一旗組〉や、〈故郷に錦を飾る〉人々も少なくなかった。例えば、戦前の日本人の中南米移民にはこのような出稼ぎ意識が強かった。ペルー移民の場合第二次世界大戦により多くの日本人指導者が不当にも米国の強制収容所に入れられ¹⁰ 他の日本人も戦時下で帰国の道を閉ざされたためペルー国籍を取得するようになった。

しかしながら祖国が経済的に繁栄するようになると多くの日系人が日本へ出稼ぎや移民として来るようになっていく。数世代にわたり祖国との縁が切れないことに注意すべきである。¹¹

¹⁰ これらの日系人はアメリカ合衆国の日系人と同様に長い裁判の努力の結果、戦後、謝罪と補償を勝ち取った。

¹¹ 特に日系ブラジル人の青少年は *double limited* として母国語であるブラジル語も日本語も満足にできないために日本社会にうまく適応できず集団で非行に走るケースが多く様々なボランティア団体の活動対象となっている。また母親も日本語能力が十分でない場合が多い。文化庁はこうした外国人の日本語能力の向上に努めて数多くの NPO 法人やボランティアの援助を振興している。移住者の言語能力は極めて重要である。とりわけ人口減少のために外国人移住者の安定的永住を目指す日本としては彼らの言語能力向上は喫緊の課題である。

近年の移民研究では移民者を一つのリンクとして二つの社会が人的にも経済的にも交流する視点が取られるようになってきている。恐らく労働人口を中心とする人口の移動の流動性の本格的な開始かもしれない。この際、母国の政府の政策が重要になってくる。自国民の出国に対して柔軟な政策をとる場合と出国者が難民状態で出る場合とではかなり異なる。¹²

部族間の大量の殺戮が続いたアフリカでは多くの難民が生じて子供を中心に大量の死者が出ている。帝国主義時代のヨーロッパ列強による勝手な「国境」線引きと非難しても現状は簡単には変わらないがアフリカ大陸が流浪の大地と化しているようである。部族等の人口分布を無視した国境線の他に宗教上の線引きがある。現在のスーダンの南部地方の独立運動を前にして北部は日常生活すべての面でイスラームの教えを浸透させるためにシャリーアを強化すると伝えられている。

6. 産業社会と移動

18世紀イギリスの農村では人口の過剰が続き都市に押し出された。産業革命により勃興してきた新都市は極めて非衛生的な職場・住環境は耐え難いものであった。¹³ こうした都市から逃避行が始まる。行く先は北アメリカである。農村→産業都市→北アメリカというルートが定番となってくる。とりわけ1845年のアイルランドのジャガイモ飢饉により引き起こされた初期移民はイギリス諸島からの大規模な集団脱出の先駆けとなった。

黒人奴隷のような強制移送とは異なるがこれらの移民も自発的意思とは言うものの経済的な半強制的な移送と言えよう。

7. 産業社会と囚人の移送

1718年、イギリスは囚人移送法を制定する。それは軽い罪に対して北アメリカへの7年間の追放を定め、そのうえ死刑が国王の意向により追放刑に軽減できる内容だった。微罪を犯した者、例えば庭の木を12本盗んだ若者はオーストラリアへ追放12年の刑を下された。

この法律により関係者は利益を得たが最大の利益を得たのは当時、労働力不足をきたしていたアメリカにおける国王の植民地や農園だった。この法律による強制移送は60年近く続き4万人以上の囚人が新世界に送り込まれた。

しかしながら1775年にアメリカ合衆国の独立宣言が発せられるとイギリスのアメリカへの囚人の移送は拒否された。その結果、イギリスの刑務所は囚人で溢れた。政府当局はアメリカが再度移送を許可するのを待って監獄船に囚人を詰め込んだ。こうしてイギリスはアメリカの囚人受け入れを待ち続けたが答えはノーだった。そこでイギリス政府はあれこれ流刑地を探し

¹² この点で注目に値するのがベトナムである。1970年代80年代にボートピープルなどで反政府と目される人々を海外に追いやった政策は現在では180度転換している。まずドイモイ政策の採用以降はベトナム戦争直後海外に逃げた人々に帰国を呼びかけ様々な優遇措置を講じている。さらにここ数年間自国民の海外での出稼ぎや結婚を大幅に緩めている。その結果、台湾でのベトナム花嫁の数が激増している。

¹³ 例えば、1860年代に下水道計画が実施されるまで都市の道路は汚物が堆積し悪臭を放っていた。生活環境のすぐ身近な場所に堆積する排泄物の山は単に悪臭の原因となるばかりか幾度となく繰り返される感染症の大流行の原因でもあった。

たがなかなか見つからず最終的な候補地は1770年にキャプテン・クックが発見した不毛と思われていたオーストラリアだった。1787年5月イングランドのポーツマス港を出航した11隻の船から成る船団は736人の囚人を乗せていた。全員が軽犯罪者だったと言われている。航海は食事も十分与えられず環境も劣悪でありオーストラリアに着くまでに40人が死亡した。

1860年代になり囚人移送は通常の刑罰から外された。1868年最後の流刑船がイギリスを出航するまで男囚16万人、女囚2万人余がオーストラリアに向かった。¹⁴

先住民にとり災厄はここで終わったわけではない。1850年代にヴィクトリア地方で金鉱が発見されるとおびただしい数の探鉱者がやってきた。19世紀後半の移住者は年平均4万人を超えたと言われている。先住民にとりヨーロッパ人は南北アメリカと同様に災厄の根源だった。彼らは様々な疫病を持ちこみ土地を取り上げさらには直接的暴力行為によりアボリジニーの人口は90%も激減した。¹⁵

8. 帝国の拡大

地政学的に言うならば基本的にシーパワーだったイギリスはランドパワーとなるロシア（そしてソ連）とアメリカにその座を譲る。シベリアを征服したロシアは中央アジアに乗り出しイギリスと衝突し始める。19世紀から20世紀にかけての主要な世界的衝突である。ロシア帝国の膨張はソ連時代になり多数の衛星国の支配で絶頂に達するがソ連の崩壊により帝国は解体した。「社会主義の20世紀」も遠くなった今日から見るとソ連は「一国社会主義」や「世界同時革命」といったイデオロギーではなくある帝国の膨張、解体の進行過程と見る方が理にかなっているだろう。ソ連邦の非ロシア人地域や衛星国に散っていたロシア人はロシア本土に回帰せざるを得なかったし、あくまで残る場合には内戦を引き起こす要因となった。

9. アメリカ帝国の存続

ソ連崩壊により20世紀後半に文字通りの超大国となり21世紀には唯一の超大国となったアメリカはシーパワーとランドパワーを兼ね備えた超大国である。アメリカは19世紀後半から中国を市場として注視していた。日本は眼中になかったと言ってよい。太平洋戦争は恐らく歴史上の余談でしかないものだろう。1890年代にフロンティアが消滅したとはいえアメリカ大陸は広大である。ニューディール政策や今後の新たなフロンティアも決して不可能ではないだろう。石油にしてもレアソイルにしてもアメリカに存在する。但し、アラブ世界や中国から購入した方が安いから自国の資源を開発しないだけであるし、また出来ることなら戦略物質として温存した方が賢明というものである。

アメリカは当初から移民により創られた国である。それもあり移民政策のプロと言ってよいだろう。影の政府があるなしにかかわらずオバマ大統領の選出は絶妙なタイミングとも言えよう。

¹⁴ 囚人を事実上の奴隷労働に近い存在として使役することは近代社会でも生き続ける。アメリカで大企業が囚人労働を利用している。

¹⁵ ラッセル・キング前掲書。

アメリカは今後も移民を受け入れるだろう。新しい血を常に受け入れることこそこのシーア
ンドランドパワーの持続の条件である。

10. 古くて新しい帝国——中国

移動の一大震源地。現在、一国で最も移動が沸騰している国と言えば中国である。14億人を
超える人口の内陸部から沿海部へ向かう農工の流れはすさまじいものがある。例えば、数年前
まで人口が9,000万人だった河南省は現在では1億人を超す人口を有している。この凄まじい
までの移動は今後も続くだろう。リーマンショック以降格差がさらに一段と拡大する今日、職
を求めて内陸から、貧困地帯から移動する人々の流れはやむことはないだろう。

中国の移動は国内に止まらない。アフリカでも100万人以上の中国人が存在すると言われて
いる。海外に出て行く中国人はこれから加速度的に増大するだろう。既に沿海部の賃金は上昇
しつつあり海外へ安い賃金を求めて出ていく気配が生まれている。バングラデシュやミャン
マーは標的となるだろう。

しかも共産党独裁政権が崩壊した場合、内乱などの最悪のシナリオが実現した場合、東アジ
アの人口移動は史上例を見ないものとなるだろう。一部の研究者によると中国共産党政権の瓦
解はセットされており残された問題は何時ごろかということである。

すでに中国社会内部には一人っ子政策という静かな時限爆弾が時を刻みつつある。例えば近
年ささやかれている「80年代世代」はこの時限爆弾の一つの成果である。彼らはかつての国内
外の出稼ぎに出ていた人々とは異なり親元への仕送りはせず、賃金は全て自分のために使うと
いう。反日（反政府）デモの主役はこの世代だと言われている。これらの人々が中国の主役と
なった時の中国社会のありようは想像が難しい。

中国の最大の問題の一つが少数民族ということと言われてから久しい。この問題に一言述べ
ておこう。中国の民族問題の根本は漢民族というフィクションがあらわになった時に起こる事
態である。漢民族という実態は存在しない。あるのは少数民族という実体に対する利害関係集
団が漢民族と称しているに過ぎない。このことが一層あらわになり従来、中国という多民族国
家という神話を糊塗してきた漢民族概念が崩壊することである。言い換えると最大の民族集団
である漢民族の支配の正当性が失われる時である。この時最大最悪の移動が生じるだろう。

11. おわりに

移動研究は様々な学問分野に散在するが今後精力的にまとめる必要がある。移動は21世紀の
今日ますます盛んになるだろう。多くの先進国、中進国がますます高齢化と人口減少に悩み移
民を受け入れざるを得なくなってきた。日本も韓国も台湾も然りである。またヨーロッパ
内部で労働力の移動は数十年前から盛んに行われており、そのツケが現在回ってきているこ
とはドイツのトルコ系住民の差別問題一つとって見ても分かつ。日本に限ってみると統一的な
移民政策が不在のために、現場の入管のさじ加減がまだメインの方策となっている。隣国の韓
国は2011年1月になり、条件付きで二重国籍を認めるという思い切った政策を打ち出してきた。

日本が移民を受け入れられないことはない。古代日本では主として朝鮮半島、中国大陸から数多くの移民を受け入れ、混血的な豊かな日本文化を形成することに成功した。日本人は異文化に対する寛容性をまだ有していると思われる。

しかしながら東アジアそして世界で最も動向が注目されるのはやはり中国である。中国でも高齢化は加速度的に進行している。しかも 1979 年から始まった一人っ子政策の最年長世代が 30 歳代に到達してきている。この政策は中国人のパーソナリティを変えてきているようである。それだけでなく一人っ子同士が結婚すると理論的には双方の父母、祖父母が計 8 人を養わなければならない。労働力の問題、家族の扶養能力の問題等数多くの問題に中国はこれから取り組まなければならない。ましてや内乱などにより大量の難民が周辺の諸国に流出した場合の混乱は想像を絶する。日本はこれらのシミュレーションを基礎に早急に対策を講じる必要があるだろう。